というような項目に該当する者も殆んどいない。「ほかの子供のことをほめて話す」「大人に云いつけずに、ほかの子供のあやまりを訂正してやる」も殆んどいない。「競争心がある」「嫉妬心がある」は施設児の方が多い。これを要するに、これらの施設児は、養護の任に当る大人の手でまとめられて、集団生活をしているが、集団内に於ける個人対個人の関係が、難しくなっていると考えることができる。ここに注目すべきことは、集団生活をしながら、「自分のしたことに責任を負う」「まかされたことを責任をもってする」が、一〇〇%だめである。

以上は、普通児と比較するために、著るしい差異を示すものを引き抜いて示したが、この調査票によってみると、施設児はいつも、普通児と比較して、おとっているとかおくれているとかいうことはできないようである。前述した項目のなかにも、一、二あったが、その他、「友達仲間から除け者にされたり、馬鹿にされたり」する者は非常にすくない。これらの点では、施設児の方がむしろ、進んでいるかも知れない。勿論これは、調査した施設についての話だけである。研究をお許し下さった施設に対して厚く謝意を表する。

第2日

幼児の遊びの観察

運動場における新入児と二年保育児との関係

名古屋大学　旭　妙子

一、序

幼稚園の運動場とは、今まで家族と僅かの近所の子供たちとしか交ったことのない新入児が初めて同じような年の多数の子供と交わるところである。又、そこは二年児や年長児がいて、新入児が自由に遊ぶことのできないところでもある。この中に入って新入児はどのような過程を通って、今の二年児のように自由に運動場を使って遊ぶようになるのであらうか。その実態を明らかにするのが本研究の目的である。私達はこの過程を process を知ることによって、新入児を今よりも早く、無理なく運動場に、ひいては幼稚園生活全体に適応させるように指導する為の資料を得ることができるのである。

ここでは、その第一報告として、一年児と二年児との運動場における関係を観察法によって調べた結果を報告しようと思う。具体的には、一般に、一年児は自分たちだけで遊んでいる時とは、広い運動場の好きな場所でのびのびと遊んでいますが、そこへ二年児が入ってくるとそれが何らかの変容を受けるということが考えられる。それを実証的に明らかにしてみようと試みたものである。

二、実験手続

(1)日時　昭和三〇年五月上旬

(2)被験者　名古屋市御東幼稚園男児（年令四〜五才）一年児、二年児各四五名、計九〇名。

被験者のうち一年児は在園一ケ月、二年児は一年一ケ月を経過。

(3)観察者　名古屋大学教育心理学教室教官四名、学生一〇名、計一四名。

(4)観察場面　運動場。トロッコ二台、滑り台、ブランコ二台、安全ブランコ、ジャングルジム、鉄棒がある。広さ三八〇坪。

(5)観察方法　被験者は一年児と二年児を一五名ずつ各三グループに分け、前者を I_a, I_b, I_c 後者を II_a, II_b, II_c とする。この場合各グループ間に年令差はない。即ち、一年児と二年児の間には唯幼稚園経験年数の差のみがある。

実験は一～三までで、一実験に二グループが使われる。この場合、先に運動場に入るグループをA、遅れて入るのをBとし、Aのみの切面をα、A＋Bの場面をβで現す。

観察時間は、Aが入って五分後から記録を開始し、一〇分経過後Bを投入、更に一〇分間の観察記録をとる。これを纒めたのが表Ⅰである。

表　Ⅰ

観察場面	α	β
観察時間	10分	10分
実験 1	I_a	I_a+I_b
実験 2	II_c	II_c+II_a
実験 3	III_b	II_b+II_c

(6)記録　この実験で得られた資料は次の五つである。

①自由記述法 *open ended method* による行動記録。②時間見本法 *time sampling method* により、子供のグループの結合状態（孤立していたか、他の子供と交渉をもったか）、争いの有・無を、一分毎にチェックリストに記録。③前述の①と②は各々五人の観察者が観察領域を分担して受持ち、その領域内の子供のみを観察するのであるが、それとは別個に、全体の子供の行動の移動状態を自由記述法により記録。④実験二の終了後、幼児毎に「一番したかった遊び」を尋ねたもの。⑤カメラによる特徴ある行動の記録。

三、結　果

(1)一年児が運動場で遊んでいるところへ二年児が入って来た場合、

表Ⅱ　幼児の結合状態

群	A*		B	
結合 / 実験	I**	C	I	C
1	56	60	45	71
2	62	64	17	118
3	17	100	19	103

A*はα場面のみの人数。I**は isolation, Cは Co-operation.

表Ⅲ　β場面の結合

結合の種類 / 実験	A×B	A	B
1	69	29	9
2	21	24	69
3	70	20	25

表Ⅳ　β場面の結合（回数）

結合の種類 / 実験	A×B	A	B
2	21	13	3
2	6	12	27
3	24	9	14

表Ⅴ　争いの人数と遊具

遊具 / 実験	場面	トロッコ	滑り台	ブランコ	安全ブランコ	ジャングルジム	鉄棒
1	α	2	4				
	β	6	2				
2	α	5					
	β	10		2			
3	α	8				2	
	β	12	10	4			
計		43	16	6		2	

表Ⅵ　β場面の争い（回数）

群	A×B			A×A	B×B
争いの勝敗 / 実験	A＞B	A＜B	A＝C		
1			1	1	1
2	1	3		2	
3	2	6	2	1	

即ち実験二が実験一或いは三と比較して明らかに差があると認められたのは次の二点である。

(1)β場面における子供の結合状態の差　これは、表Ⅲ及びⅣに欠られるようにβ場面でA群とB群の子供が一緒になって遊ぶことは、実験二お場合が一番少い。即ち、遅れて入って来る子供が同じような幼稚園経験年数をもつ子供であれば、前からいる子供と一緒になって遊ぶことができるが、経験年数が違う場合には、二つの群は夫々別個に遊んでいる。実験一と二、二と三の間の差は統計的に有意である。一年児の三グループ間、二年児の三グループ間の結合関係は表Ⅱに示したように差がない。

(2)争いの数と群の関係　表Ⅵに示すように、β場面における争いはA群とB群の間に多く見受けられた。「争いの回数」が少ない為に統計的検定は不可能であるが、見たところ、実験一と二、一と三の間に差が認められ、二と三の間には差がない。従って、このことから子供の幼稚園経験年数が長い程、争いの回数が多くなることがわかる。しかし、一年児が遊んでいる所へ二年児が入って来たことによって一年児が二年児からどんな圧力をうけるかは、この実験から結論できない。それには実験二の逆、即ち、二年児の中へ一年児を入れる実験を付け加えなければならない。

(2)三つの実験に共通して見られることは、争いの数は遊具の種類によって異なることである。表Ⅴに示されるようにトロッコが一番多く、滑り台、ブランコ、ジャングル・ジムの順となっている。この順席は子供の興味の順序にも一致した。

四、今後の問題(省略)

家庭に於ける保育知識をめぐる問題点

名城大学　田中一成

Ⅰ、調査の意味…①今日保育機関は全国的に不足している。又たとえ充分に存在するとしても教育の場としての家庭の意義は弱まるものではないこと。

②然るに家庭保育の中心者は主として母親であるが、母親の保育知識とその技術は不充分であると見られる事。

以上から次の二つの点について調査研究して見たものである。

Ⅱ　家庭に於ける保育の困難点

家庭教育上困難を感じている所を質問して　①躾、②健康教育、③性格教育、④経済関係、⑤遊びの場……の順となっている。(頁の都合により表省略)

又第二表に於ては躾の点を調べて　①我儘、②兄弟けんか、③偏食、④甘える、⑤お片付けが出来ない……の順となっており、(頁数の都合により表省略)これら各項の保育困難の訴えはその原因を三つの面に分析が出来る。①は生活環境が悪い。買ぐせ②は幼児の発達過程を親が承知していない(反抗)。③は親の愛情を科学的に処理出来ない(我儘)。そして第三の点による困難が最も強く現わ